

## 海外の話題

# 「寝そべり族」は急増しているのか？

農林中央金庫 北京駐在員事務所 首席代表 米坂 樹紀

—— 「寝そべり族」の急増は中国経済にどのような影響を与えるのでしょうか？

日本から寄せられるこの手の質問に在中国の某日本人エコノミストは「また、その話か」とうんざり気味です。

今年上半期の中国の新語・流行語大賞というものがあれば、「寝そべり族」が受賞するのは確実でしょう。寝そべり族とは消費意欲が低い草食系若者で、マンションも車も結婚もあきらめ、あくせくと働くことなく日々を過ごしている人々のことを指しています。

寝そべり族は中国語では「躺平（タンピン）族」。中国のネットスラングとして広まった背景には、中国の厳しい競争社会、労働環境や埋めがたい格差へのアンチテーゼとして「寝そべり」が一定の共感を得たことがあるとされています。

しかし、そこは中国、国営メディアが寝そべり族を向上心がなく自己中心的な態度だと一喝。中国では7月ごろまでに寝そべり族はホットワードからは消えていきました。寝そべり族の反響・余韻が長続きしたのは日本の方でした。日本でも以前から寝そべり族的なライフスタイルは珍しくはありませんので、中国の今を切り取るワードとして「寝そべり族」は日本人にも理解しやすかったのでしょう。

日本でのメディアの伝え方は「中国の若者の間で広がる寝そべり族」というふうになっていたかと思います。報道は概ね事実ではありますが、問題は今になって中国で寝そべり族が急増したのかどうかです。中国でも以前から寝そべり族は存在しており、「躺平族 / 寝そべり族」という気の利いたネーミングによって世間の注目が集まっただけではないか。そんな思いが冒頭のエコノミスト氏の違和感にもつながっています。

寝そべり族が急速に勢力を増大させているのであれば、マクロ的にも、マーケティング的にもインパクトが出てくるかもしれません。逆に寝そべりが価値観の多様化という長期的な趨勢の中に納まる話であれば短期的な経済インパクトは大きくはないでしょう。残念ながら寝そべり族に関する統計などはありませんが、私は後者ではないかと感じています。

——インタビューできる「寝そべり族」をもっと探してこい！

日系テレビ局中国総局の某中国人記者アシスタントは上席日本人記者から繰り返される指示に違和感を覚えています。この上席は何人の寝そべり族を取材したら気が済むのだろうか。この上席は中国では寝そべり族の若者であふれているとでも思っているのだろうか、と。なお、この記者アシスタント、猛烈にビジネスにまい進する若者を題材に採り上げて「寝そべり族だけでない、中国の若者」という取材アイデアを上席に提案しています。結果はもちろん「却下」でした。

猛烈なスピードで発展してきた中国が転換期を迎え、中国にも多様な価値観・ライフスタイルが出現している中で寝そべり族が一定の存在感を持ち始めているのも確かだと思います。しかし、寝そべり族だけに過度なフォーカスを当てていると中国への適切なビジネスアプローチを外してしまう——この記者アシスタントが伝えなかったのはそういうことだと思います。

以上